

## 基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	専門職大学の設置							
フリガナ設置者	シズオカケン 静岡県							
フリガナ大学の名称	シズオカケンリツノウリンカンキョウセンモンシヨクダイガク 静岡県立農林環境専門職大学 (Shizuoka Professional University of Agriculture)							
大学本部の位置	静岡県磐田市富丘678-1							
大学の目的	将来の農林業現場を支える人材に求められる知識・技術を備えるとともに、農山村の景観・環境・文化等を理解し地域社会を支えていくことができる専門職業人の養成を通じ、静岡県の農林業や農山村地域の発展に貢献する。							
新設学部等の目的	農林業生産を行うための基礎的な知識や技術に加え、経営体の経営革新を推進する加工・流通・販売の知識や経営管理能力、先端技術への対応力を有するとともに、地域社会における未来のリーダーとして、自然と共生し、美しい農山村の景観や環境を磨き上げ、幅広い教養と豊かな人間性を備え地域の文化や伝統を守っていくことのできる農林業者を養成する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	生産環境経営学部 [Faculty of Agricultural Production and Management] 生産環境経営学科 [Department of Agricultural Production and Management]	4	24	-	96	農林業学士（専門職） [Bachelor of Agriculture]	年 月 第 年次 平成32年4月 第 1 年次	静岡県磐田市富丘678-1
	計		24	-	96			
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）	静岡県立農林大学校 養成部（廃止）（△100）※H32年4月学生募集停止 研究部（廃止）（△ 20）※H33年4月学生募集停止 静岡県立農林環境専門職大学短期大学部 生産科学科(100)（平成30年10月認可申請）							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
		講義	演習	実習	計			
	生産環境経営学部 生産環境経営学科	73科目	16科目	23科目	112科目	129単位		

教員 組織 の 概要	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計		助手
新 設 分	生産環境経営学部生産環境経営学科		14 (12)	5 (5)	4 (3)	1 (1)	24 (21)	- (-)	39 (25)
	計		14 (12)	5 (5)	4 (3)	1 (1)	24 (21)	- (-)	39 (25)
既 設 分	該当なし		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)
	計		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)
合計			14 (12)	5 (5)	4 (3)	1 (1)	24 (21)	- (-)	39 (25)
教員 以外 の 職員 の 概要	職種		専任		兼任		計		静岡県立農林環境 専門職大学短期大 学部と兼務含む
	事務職員		20 (20)		3 (2)		23 (22)		
	技術職員		- (-)		15 (15)		15 (15)		
	図書館専門職員		1 (1)		1 (1)		2 (2)		
	その他の職員		5 (2)		- (-)		5 (2)		
	計		26 (23)		19 (18)		45 (41)		
校 地 等	区分	専用	共用		共用する他の 学校等の専用		計		静岡県立農林環境 専門職大学短期大 学部（必要面積 2,000㎡）と共用 平成33年度までは 静岡県立農林大学 校と共用
	校舎敷地	- ㎡	18,076 ㎡		- ㎡		18,076 ㎡		
	運動場用地	- ㎡	10,469 ㎡		- ㎡		10,469 ㎡		
	小計	- ㎡	28,545 ㎡		- ㎡		28,545 ㎡		
	その他	- ㎡	52,499 ㎡		- ㎡		52,499 ㎡		
合計		- ㎡	81,044 ㎡		- ㎡		81,044 ㎡		
校舎		専用	共用		共用する他の 学校等の専用		計		静岡県立農林環境 専門職大学短期大 学部必要面積 2,400㎡）と共用 平成33年度までは 静岡県立農林大学 校と共用
		494 ㎡ (392 ㎡)	5,849 ㎡ (3,395 ㎡)		453 ㎡ ( 152 ㎡)		6,796 ㎡ (3,939 ㎡)		
教室等	講義室	演習室	実験実習室		情報処理学習施設	語学学習施設		大学全体	
	16 室	0 室	7 室		1 室 (補助職員0人)	0 室 (補助職員0人)			
専任教員研究室		新設学部等の名称			室数			共同研究室3室は静 岡県立農林環境専門 職大学短期大学部と 共用	
		生産環境経営学部生産環境経営学科			24 室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	図書、機械・器具 及び標本は静岡 県立農林環境専門 職大学短期大学部と 共用	
	生産環境経営学部 生産環境経営学科	12,816 [366] ( 7,689 [219] )	40 [20] (40 [20] )	20 [20] ( 20 [20] )	64 (38)	975 (585)	2 (2)		
	計	12,816 [366] ( 7,689 [219] )	40 [20] (40 [20] )	20 [20] ( 20 [20] )	64 (38)	975 (585)	2 (2)		

図書館		面積		閲覧座席数		収納可能冊数		大学全体		
		662 m <sup>2</sup>		60 席		50,000				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
		904 m <sup>2</sup>		該当なし						
経費の 見積り 方法及び 維持の概	経費の 見積り	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用コストを含む）を含む 図書及び設備は静岡県立農林環境専門職大学短期大学部と共用のため、合算した金額
		教員1人当り研究費等		250千円	250千円	250千円	250千円	－千円	－千円	
		共同研究費等		2,250千円	2,250千円	2,250千円	2,250千円	－千円	－千円	
		図書購入費	51,494千円	34,330千円	200千円	200千円	200千円	－千円	－千円	
	設備購入費	368,506千円	245,670千円	720千円	720千円	720千円	－千円	－千円		
学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		①県内の者 ②県外の者	
		①463千円 ②689千円	322千円	322千円	322千円	－千円	－千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			県費、雑収入等							
既設 大学等 の 状況	大 学 の 名 称 静岡県立農林大学校									
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	養成部 研究部	年 2 2	人 100 20	人 - -	人 200 40	専門士 -	0.99 0.28	平成11年度 平成11年度	磐田市富丘678-1	
附属施設の概要		[農場]								
		① 名 称： 実習圃場 所在地： 静岡県磐田市富丘678-1 規模等： 建物：2,043m <sup>2</sup> 、土地15,843m <sup>2</sup> ② 名 称： 機械研修場 所在地： 静岡県掛川市下垂木2770-1 規模等： 建物：1,022m <sup>2</sup> 、土地：36,656m <sup>2</sup>								
附属施設の概要		[牧場]								
		① 名 称： 静岡県畜産技術研究所（本所） 所在地： 静岡県富士宮市猪之頭1945 規模等： 建物：12,732m <sup>2</sup> 、土地121.9ha ② 名 称： 静岡県畜産技術研究所 中小家畜センター 所在地： 静岡県菊川市西方2780 規模等： 建物：9,282m <sup>2</sup> 、土地9.3ha								
附属施設の概要		[演習林]								
		名 称： 静岡県有林 所在地： 浜松市 規模等： 森林面積294ha ※附属施設の概要については、「設置の趣旨等を記載した書類 資料27」参照								

教 育 課 程 等 の 概 要																
(生産環境経営学部生産環境経営学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手			
① 基礎科目	一般教養	静岡学	1通	2			○			1						
		歴史学概論	2前		2		○				1					
		文明論	2後			2	○								兼1	
		文学概論	2後		2		○								兼1	
		茶道	3前			1			○						兼1	
		華道	3前			1			○						兼1	
		経済学概論	1前	2			○								兼1	
		法学概論	1前		2		○								兼1	
		社会学概論	1後		2		○								兼1	
		政治学概論	1後		2		○								兼1	
		統計学	1後		2		○								兼1	
		情報処理基礎	1前	1				○			1					
		情報処理応用	2後	1				○			1					
① 基礎科目	コミュニケーション・スキル	コミュニケーション論	1前	2			○								兼1	
		英語 I	1前		2			○							兼1	
		英語 II	1後		2			○							兼1	
		英語 III	2前		2			○							兼1	
		英語 IV	2後			2		○							兼1	
		保健体育 I	1通	2					○						兼1	
		保健体育 II	2通		2				○						兼1	
小計（20科目）		-	10	20	6	-			2	2	0	0	0	兼12		
② 職業専門科目	農林業基礎	農学概論	1前	2			○			5	2				兼4	オムニバス
		環境と農林業	1後	2			○			2		1				オムニバス
		農林業史	1後			2	○				1					
		農林業政策	1前		2		○			1						
		技術者倫理	3前	2			○			2	1				兼4	オムニバス
		県内農林業事情	1前		2		○			4	1					オムニバス
		県外農林業事情	2前			1		○		1						集中
		海外農林業事情	3前			1		○		1						集中
		農林業のための基礎数学	1前		2		○									兼1
		農林業のための生物学	1前		2		○			1						
		農林業のための化学	1前		2		○			1						
		農林業のための物理学	1後		2	2	○									兼1
		農林業のための地学	1後		2	2	○			1						
		分子生物学	1前		2		○				1					
	農業気象学	2前	2			○			2		1			兼1	オムニバス	
	生命科学	1後		2		○				1	1				オムニバス	
	野生鳥獣管理・利用論	1後		2		○									兼1	
	（生産理論） （共通理論）	農林業生産理論	1後	2			○			3	1					オムニバス
		環境保全型農林業論	3前	2			○			1		1			兼2	オムニバス
		農林業のための先端技術	3前	2			○			1						
	（生産理論） （栽培理論）	作物学	2前		2		○			1						
		園芸学	2後		2		○			3						オムニバス
		園芸学各論	3前			2	○			3						オムニバス
植物病理学		2前		2		○			1							
応用昆虫学		2後		2		○			1							
土壌肥料・植物栄養学		2前		2		○			2						オムニバス	
植物遺伝育種学概論	2後			2	○					1			兼1	オムニバス		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
②職業専門科目	(生産理論) (林産理論)	森林計画・政策論	2前		2		○			1	1				兼1	オムニバス
		造林学	2前		2		○								兼1	
		森林土木学	2前		2		○			1						
		木質科学概論	2後		2		○					1				
		木材生産システム	2後		2			○		1						兼2
	(畜産理論)	飼料総論	2前		2		○			1						
		家畜生理解剖学	2前		2		○					1				
		家畜育種繁殖学	2後		2		○								兼1	
		家畜飼養学	2前		2		○			1						
		畜産法規	3前			2	○								兼1	
		人工授精論	2後			2	○								兼1	
		家畜衛生学	2後		2		○				1					
	経営管理	簿記基礎	1前			1		○							兼1	
		簿記応用	1後			1		○							兼1	
		フードシステム論	1後			2	○			1						
		経営管理論	1後	2			○			1						
		農林業経営学	1前	2			○			1		1			兼2	オムニバス
		経営戦略	2前	2			○			1						
		マーケティング論	2後	2			○			1						
		財務会計	2前	2			○								兼1	
		管理会計	3前	1			○								兼1	
		農林業の経営組織論	3前			2	○			1					兼1	オムニバス・集中
		労務管理	2後	2			○								兼1	
		人材マネジメント	3後	2			○								兼1	
		知的財産権	3後			2	○								兼1	
	経営実習Ⅰ	4前	5					臨	14	5	4	1				
	経営実習Ⅱ	4後	5					臨	14	5	4	1				
	加工・流通・販売	食品科学	2前			2	○				1					
		収穫後生理学	3前			2	○			1						
		木材利用・流通論	2後		2		○			1					兼1	
		食品流通論	3前		2		○									
		農と食の健康論	2後			2	○			1	1					オムニバス
		6次産業化実践論	3後	2			○			1						
食品加工実習		3前		2			○		1					兼1	共同※講義	
木材加工実習		3前		2			○		1					兼1	オムニバス※講義	
販売管理実習		3前	2				○		1					兼1	共同※講義	
生産技術	総合実習	1通	2				○				3	1		兼5	オムニバス・共同	
	圃場実習(栽培)	2前		2			○				2			兼7	オムニバス・共同	
	圃場実習(畜産)	2前		2			○				1			兼1	共同	
	演習林実習	2前		2			○					1		兼1	共同	
	生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)	2後		4			○				2			兼6	共同	
	生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)	2後		4			○			1	1			兼1	共同	
	生産マネジメント実習Ⅰ(林業)	2後		4			○			1				兼1	共同	
	生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)	3通		4			○				2			兼6	共同	
	生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)	3通		4			○			1	1			兼1	共同	
	生産マネジメント実習Ⅱ(林業)	3通		4			○		1	1				兼2	オムニバス・共同	
	大型機械実習Ⅰ	2前	2				○				1				集中	
	大型機械実習Ⅱ	3前			2		○					1			集中	
	林業機械実習	3・4前			2		○			1					集中・隔年	
	GAP演習	2前	2				○				1			兼2	オムニバス	
企業実習	3後	10					臨	3		1				共同		
小計(79科目)	-	57	80	42		-			14	5	4	1	0	兼26		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
③ 展開科目	農山村田園地域公共学	1前	2			○				1					兼1 集中 兼1 集中 兼1 オムニバス 兼1 兼1		
	農村景域論	3前	2			○				1							
	農と食の哲学	2前	2			○											
	食文化論	2後	2			○											
	在来作物学	3前	2			○				1							
	農村社会論	1後	2			○											
	農山村デザイン演習	2後	2				○										
	医福食農連携論	2後	2			○				1							
	グリーン・ツーリズム論	3前	2			○											
	コミュニティビジネス論	3後	2			○											
小計(10科目)	-	20	0	0	-	-	-	1	3	0	0	0	0	兼3			
④ 総合科目	経営分析演習Ⅰ	4前	1				○		14	5	4	1					
	経営分析演習Ⅱ	4後	1				○		14	5	4	0					
	プロジェクト研究	4通	2				○		14	5	3	1					
小計(3科目)	-	4	0	0	-	-	-	14	5	4	1	0	-				
合計(112科目)	-	91	100	48	-	-	-	14	5	4	1	0	兼39				
学位又は称号	農林業学士(専門職)	学位又は学科の分野			農学関係												
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
<p>&lt;卒業要件&gt; 基礎科目より20単位以上、職業専門科目より85単位以上、展開科目より20単位、総合科目4単位を修得し、合計129単位以上とする。</p> <p>(基礎科目)必修10単位と、英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語Ⅲから4単位を含む20単位以上</p> <p>(職業専門科目)85単位以上</p> <p>■「農林業基礎」 必修6単位を含む10単位以上</p> <p>■「生産理論」 コースを選択し、必修6単位、コース必修10単位を含む16単位以上</p> <p>◎栽培コース必修:作物学、園芸学、植物病理学、応用昆虫学、土壌肥料・植物栄養学</p> <p>◎林業コース必修:森林計画・政策論、造林学、森林土壌学、木質科学概論、木材生産システム</p> <p>◎畜産コース必修:飼料総論、家畜生理解剖学、家畜育種繁殖学、家畜飼養学、家畜衛生学</p> <p>■「経営管理」 必修25単位</p> <p>■「加工・流通・販売」 生産理論科目群と同じコースを選択し、必修4単位、コース必修4単位を含む8単位</p> <p>◎栽培コース・畜産コース必修:食品流通論、食品加工実習</p> <p>◎林業コース必修:木材利用・流通論、木材加工実習</p> <p>■「生産技術」 生産理論科目群と同じコースを選択し、必修16単位とコース必修10単位を含む26単位以上</p> <p>◎栽培コース必修:圃場実習(栽培)、生産マネジメント実習Ⅰ(栽培)、生産マネジメント実習Ⅱ(栽培)</p> <p>◎林業コース必修:演習林実習、生産マネジメント実習Ⅰ(林業)、生産マネジメント実習Ⅱ(林業)</p> <p>◎畜産コース必修:圃場実習(畜産)、生産マネジメント実習Ⅰ(畜産)、生産マネジメント実習Ⅱ(畜産)</p> <p>(展開科目)必修20単位</p> <p>(総合科目)必修4単位</p> <p>(履修科目の登録の上限:45単位(年間))</p>						1学年の学期区分						2学期					
						1学期の授業期間						15週					
						1時限の授業時間						90分					

授 業 科 目 の 概 要			
(生産環境経営学部生産環境経営学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	静岡学	静岡県はものづくり県であり、産業界を牽引する数多くの業種の企業が存在し、ヒト、モノ、カネの経営資源の奪い合いが起こっている。このような中で農林業経営を行うには、農林業の枠内にとどまらず、他産業の情勢、動向を理解する必要がある。本科目では、静岡県の農業、林業などの一次産業、製造業などの第二次産業、卸売業・小売業・サービス業などの第三次産業の各界のトップランナーを招聘し、講話を聴講する。その上で、グループ・ワークと発表を通じ、今後の静岡県の農林業のあり方や発展に向けた解決策を経営の視点から考える。	短期大学との合同授業 同時に行う学生数：124人 ・各界のトップランナーの講話を聴講する貴重な機会であり、教育上必要である。 ・グループ・ワークは大学と短期大学のそれぞれのグループで行うが、発表は同じ会場で行うため、多様な意見に触れることが出来て、かつ、交流も進むため、教育効果が高い。 ・大学と短期大学でそれぞれ教員を配置しており、達成目標も異なっているため、教育水準は担保される。
	歴史学概論	現代社会が直面する課題や歴史を理解するためには、歴史的な変化のなかに位置付けて理解し、未来のあるべき姿を構想する力を身につける必要がある。本科目では、歴史学・民俗学の視点から講義を行う。前半では、信仰や年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能などの民俗文化財を通じ、人々の生活の推移について学ぶ。また、後半では、世界文化遺産に登録された「富士山」と、本学のある「遠州地域」を主とする地域の歴史について学ぶ。	
	文明論	静岡県には、登呂遺跡をはじめとして、農耕の形成から古代社会にいたる数多くの遺跡が発掘されており、その成果は現代までの農業を基盤とする日本列島の社会がどのように成り立ってきたかについて様々な知識を与えてくれている。本科目では、主に狩猟採集によって食糧を獲得する社会であった旧石器時代・縄文時代から食糧を生産する農耕社会が形成された弥生時代・古墳時代にいたる考古学研究の成果をもとに地質学・地理学・農学などの研究も参照しながら、静岡および日本列島における農耕技術や農耕文化の形成について学ぶとともに、東海地方の農耕社会形成の実態について考える。	
	文学概論	「文学」を学ぶことや読むことは、言葉を通して先人たちから引き継いだ思考の「しぐさ」（知恵）を学ぶことでもある。本科目では、近代における文学と科学との関わりについて理解を深め、われわれが生きる現代を（見る／見つめ直す）ための新しい視点を獲得することを目標とし、農業と深くかかわりつつ文学活動をした宮澤賢治や、本県焼津市とゆかりのある小泉八雲などの作品を取り上げ、自然科学的思考と文学的想像力との結びつきについて考察し、彼らが近代といかに向き合ったのかを考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目 一般教養	茶道	茶道は日本の伝統文化であり、近年“tea ceremony”として海外でも人気が高まり、世界的な広がりを見せている。また、茶道は「一盃の茶を喫む」ことだけではなく、「和敬清寂」に代表されるところと日本人の美意識をもって総合芸術と云われている。本科目は、茶のこころや茶会での作法、使用する道具・香や茶花・季節を感じる和菓子・茶の種類や味わい方、茶室や露地などの空間、茶道の歴史および茶懐石の料理などについても学び、「他人を思いやり、感謝する心」を育み、日本文化に対する理解を深めることを目的とする。	
	華道	華道は長い歴史をもつ日本の伝統文化の一つである。「花を生ける」という行為は、私たちの心にゆとりや、やすらぎを与えてくれるなど癒しの効果がある。本科目では、華道の基本である花材の種類やはさみなどの道具や花器、いけばなの知識として、三つの役枝など花を生ける際の基本的なルール、花型の種類、また、自由花や古典華（生花・立華）の知識など、花を生けるために必要な基本的な知識と技術を学び、日本文化に対する理解を深めることを目標とする。	
	経済学概論	経済学は、限りある資源を用いてモノやサービスを生産し、どうすれば我々の生活が豊かになるかを考える学問である。本科目では、ミクロ経済学及びマクロ経済学について学ぶ。前半では、需要曲線、供給曲線、市場均衡、消費者余剰・生産者余剰といったミクロ経済学の基礎概念を学び、資源の最適配分や価格決定メカニズムについて理解する。後半では、物価指数、為替レート、GDPなど統計・データ、IS-LM分析、AD-AS分析などマクロ経済学の基礎を学ぶ。	
	法学概論	普段の生活の中で法について意識することは少ないが、我々は日々、商品売買などの契約行為を行っており、日常生活と法の関連は深い。また、農林業経営を行う上で法律の知識は欠かせない。本科目では、法の基本的性格を理解し、法学の基本概念を習得することを目的とする。最初に憲法などの公法、民法などの私法、労働法などの社会法、裁判、国際法などの法学の基礎を学んだ上で、経営を行う上で特に重要である民法や商法、会社法についての基礎知識を身につける。	集中
	社会学概論	農山村などの日本の地域社会では、少子・高齢化が進み、「限界集落」が話題として挙がるなど、地域社会の衰退が大きな課題となっている。その一方で、改めて身近な生活の場である地域社会やコミュニティに関心が集まっている。本科目では、社会学の基礎理論やコミュニティ及び社会の構造や文化など、地域社会・コミュニティを考えるうえで必要な基本知識や、日本の近代社会の変化を学んだ上で、今後の日本社会や地域コミュニティ、まちづくり等について考える。	
	政治学概論	政治は、社会生活で生じる権利の侵害などのトラブルや利害の衝突を防いだり、調整することで、社会の公平と秩序を実現するための営みであり、我々の生活に深く影響している。本科目では、民主政治歴史や、福祉と政治、民主政治のさまざまな仕組みについて学んだ上で、現代政治の仕組み等として、選挙、議会、政党、利益集団、官僚制、メディアなどについて、他国との比較の視点を探り入れつつ、日本の政治的課題について検討し、政治的なもの見方や基礎的な概念を身につけることを目標とする。	
	統計学	私たちの身の回りには多種多様なデータが存在する。それらデータの背後に隠れた情報を抽出することによって、それに基づいた判断を下すことが可能になる。農林業においても、対象とする生物に関するデータや、その育成条件等に関わる様々なデータを取り扱う。これらのデータを分析することは、対象とする現象をより良く理解し、客観的な解釈をするための手がかりとなり得る。そのため、それらデータの特性に応じた適切な取り扱い方や統計解析手法を習得する必要がある。本科目では、これらのデータを読み解くための解析ができるようになることを目指し、統計学の基本的な考え方を学ぶ。講義では、簡単なプログラミング（統計パッケージRを想定）を含む演習を並行して進めることで、統計学を道具として習得することを目標とする。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
一般教養	情報処理基礎	コンピューターや情報通信ネットワークの発達により、社会の情報化によって日常生活や仕事の仕方は大きく変化しており、コンピューターは現代社会に不可欠である一方、スマートフォンなどを主に使用する世代はコンピューターを使用する機会が少なくなっている。本科目では、コンピューターの操作と、ソフトウェアであるInternet Explorer(インターネットブラウザ)、Word(ワープロ)、Excel(表計算)、PowerPoint(プレゼンテーション)の使い方を学び、現代社会における基本的な情報処理能力を身につける。	
	情報処理応用	ネットワークやExcelなどのソフトを利用した情報の収集・分析は、論文作成やプレゼンテーション資料作成の際に欠かせない技術である。本科目では、データ分析につながるコンピューターの活用、インターネットを活用した情報収集、Excelによるデータ処理・解析・グラフ作成、数理統計・検定の演習、Visual Basicによるプログラミング等の演習を通じ、大学生活のみならず社会人として必要となる実践的な情報処理能力を身につける。	
基礎科目	コミュニケーション論	私たちは日々他者と何気なく言葉を交わし、しばしば当たり前のようにコミュニケーションについて語っているが、単純な説明では言い尽くせない複雑さや曖昧さが、コミュニケーションにはつきまといっている。本科目では、コミュニケーションについて、密接に関連する言語や意味、心や感情といったことごとについて、深く掘り下げて考え、コミュニケーション理論の基本的な概要を理解し、人間と言語・コミュニケーションの関係のあり方を把握することを目標とする。	
	英語Ⅰ	英語学習の基盤を確立するため、英語の「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能の基礎力強化を図る。 「聞く」、「話す」：基礎的な英会話の訓練を行う。自己紹介、観光、外食などの日常生活に密着した場面を想定して、基本的な日常会話の練習を行う。メディア教材等を用いて、ペアワークやグループワークを行い、日常生活で頻繁に使う英会話表現を学ぶ。 「読む」、「書く」：基本的な文法を確認しながら、英文の読解及び問題演習を行う。	
	英語Ⅱ	英語Ⅰに引き続き、本科目では、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の英語4技能の基礎力を強化する。 「聞く」、「話す」：文化や習慣、趣味などの日常生活で話題になりやすいトピックスについて英語を話す人々とのコミュニケーションをとる場面を想定し、より実践的な会話練習を行う。メディア教材等を用いて、ペアワークやグループワークを行い、英会話表現を学ぶ。 「読む」、「書く」：より複雑な文法を理解するため、英文の読解及び問題演習を行う。	
	英語Ⅲ	英語Ⅰ、Ⅱでの学習に基づき、より発展的な内容に取り組むことで「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の英語4技能を高め、英語を話す人々との「ディスカッション」が出来る能力を養う。 「聞く」、「読む」：社会における最新のテーマについて取り上げる教材を読み、聞くことで理解を深める。 「話す」、「書く」：テーマに基づき英語表現を練習し、議論の手法を訓練することで、英語表現力を養う。 ディスカッション：問題点への理解と表現するための英語力を元に、英語で議論する能力を養う。	
	コミュニケーション・スキル		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	英語Ⅳ	<p>アカデミック、ビジネスの場面において、プレゼンテーションを行う機会が増えている。本科目では、次の3パートに分けて、プレゼンテーションの構造を学び、アカデミック、ビジネスの両分野で的確なプレゼンテーションが行える力を養成する。</p> <p>パートⅠ：コミュニケーションツールである「プレゼンテーション」の定義、構造、基本的スキルに加え、プレゼンテーションに不可欠な根拠の提示と、引用など守らなければならない事項について学びます。</p> <p>パートⅡ：情報を整理し、オーディエンスに正確にかつ効率よく「報告」するため、「報告型のプレゼンテーション」の構造と表現を、事例に基づいて学ぶ。</p> <p>パートⅢ：「報告型のプレゼンテーション」を発展させた「説得型・提案型」のプレゼンテーションについて、事例に基づきを学ぶ。</p>	
	保健体育Ⅰ	<p>健康的な生活を送るためには、運動の実践を通して、体力の向上と維持増進を図る必要がある。本科目では、日々の生活において、個々に取り組みやすい有酸素運動やストレッチ、体力トレーニングなどの実習を通して、自分の体に向き合いながら、美しい姿勢や健康的な身体づくりについて学ぶ。また、身体を動かす楽しさを知り、生涯にわたって運動することの大切さを理解し、運動による健康・体力づくりのために必要な知識と実践力、及び自分自身の身体とコミュニケーションする力を身につけることを目標とする。</p>	
	保健体育Ⅱ	<p>充実した生活を送るためには、心身の健康は欠かすことはできない。本科目では、種目としてサッカー、バスケットボール、バレーボールなどを予定する。各種目とも初心者が取り組みやすいように基本練習を中心とした内容を実施する。基本練習を通じ、運動に関する知識や健康維持につながる運動について学ぶとともに、仲間との身体を介した関わりにより他者とのコミュニケーション能力を高め、公正、協力などの社会性を身につけることを達成目標とする。</p>	
職業専門科目	農学概論	<p>持続的な社会の構築のため、農学には新たな展開が必要となっている。本科目では、日本の農林業の現状を把握し、環境問題、エネルギー問題、担い手問題など複雑にからみあう現実の課題を解決し、持続的な社会を構築するために現代の農学は何ができるか、どう拡大・進化を続けているかを考察する。我が国農林業の課題、作物栽培の現状と課題については、食生活の多様化に対応した作物供給、農産物輸出、経営の大規模化・農地集積等によって生じる課題について学習を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>( ② 祐森誠司/1回) 畜産の現状と課題</p> <p>( ⑦ 平岡裕一郎/2回) 日本林業の現状と課題</p> <p>( ⑧ 丹羽康夫/2回) 遺伝子組換え技術の現状と課題</p> <p>( ⑬ 松尾和之/2回) わが国農林業の課題、作物栽培の現状と課題</p> <p>( ⑬ 佐藤展之/1回) 肥料と環境問題</p> <p>( ⑭ 外側正之/2回) 有害生物の防除と管理</p> <p>( ⑯ 杉山恵太郎/1回) 野菜園芸の現状と課題</p> <p>( 26 稲葉善太郎/1回) 花卉園芸の現状と課題</p> <p>( ⑲ 杉山泰之/1回) 果樹園芸の現状と課題</p> <p>( ⑳ 中野敬之/1回) 工芸作物栽培の現状と課題</p> <p>( 42 吉村親/1回) 農業の担い手の現状と課題</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	農林業基礎	環境と農林業	<p>(概要)</p> <p>農業と林業は、それぞれの基盤である農地、森林の間で相互に関係を持ちながら、水、大気、物質の循環に貢献しつつ、多面的機能を発揮している。その一方、戦後の日本農林業の発展過程において農薬による化学物質汚染や肥料の過剰利用による富栄養化などの様々な環境問題を引き起こしてきた。本科目では、農林業が環境保全へ果たしている役割や森林のもつ景観形成機能を学ぶとともに、農林業生産が引き起こす環境問題とその対策を考える。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>( ③ 逢坂興宏/3回) 森林の環境保全機能と景観形成機能、山地の地形変化と土地利用、土砂災害とその対策の歴史</p> <p>( ⑪ 大石竜/2回) 肥料や堆肥をめぐる諸問題</p> <p>( ⑭ 外側正之/10回) 農林業と環境保全、農薬をめぐる諸問題</p>	オムニバス方式
		農林業史	日本の農林業はどのような変遷をたどってきたか。本科目では、歴史・民俗資料を活用して、農業・林業の技術史を理解し、特に遠州地域の農林業史の理解へ発展させる。最初に、農具や農業用水を取り上げ、水田稲作農耕史やその技術史を理解する。また、戦後の本県北遠地域を中心とした林業史について理解する。これらの知識をもとに、グループワークにより遠州地域の農林業について取りまとめた上で発表を行い、現代の農林業へいかに繋がっているのかを確認し、現代の課題を考察することを学習目標とする。	
		農林業政策	農林業経営が直面する課題に即した農業・食料関連政策や制度について学ぶ。わが国における農林業政策の展開を振り返るとともに、現在の食料・農業・農村基本法の下での食料自給力・食料自給率の維持向上に向けた施策、食料の安定供給の確保に関する施策、農業の持続的な発展に関する施策、農村の振興に関する施策及び、それぞれの施策の関連法について基礎的知識を習得する。また、森林・林業政策として、森林の有する多面的機能の発揮に関する施策、林業の持続的かつ健全な発展に関する施策、林産物の供給及び利用の確保に関する施策について学ぶ。現在における政策の役割及び課題について理解することを目標とする。	
		技術者倫理	<p>(概要)</p> <p>人類は、高度経済成長により飛躍的に物的豊かさを獲得してきた。農林業では、規模拡大や単作化、機械化、化学肥料・農薬の多用が進んでおり、農林業は環境問題の一端の責任を負っている。また、食の安全・安全も課題である。このような問題群の中で、農林業関係者は農林業の発展に関し大きな社会的責任を負っており、倫理的な問題が絡んでくるのが認識されつつある。本科目では、近年の異常気象、特に温暖化が農林業に与える影響と適応策について学ぶとともに、バイオテクノロジーにおける倫理、家畜福祉など農業技術者として必要な倫理を身につける。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>( ① 森口卓哉/2回) 農業と環境問題</p> <p>( ③ 逢坂興宏/3回) 森林・林業と環境をめぐる諸問題、森林・林業技術と地球倫理・環境倫理</p> <p>( ⑧ 丹羽康夫/3回) バイオテクノロジーの展開と倫理</p> <p>( ⑱ 竹内隆/2回) 農業技術と技術者の社会的責任</p> <p>( ⑳ 小林信一/1回) 家畜福祉</p> <p>( ㉑ 片山信也/2回) 畜産と環境問題</p> <p>( ㉒ 近藤晃/2回) 林業をめぐる諸問題</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	農林業基礎	県内農林業事情	<p>(概要)</p> <p>静岡県内には、農林業を牽引する多くのビジネス経営体や林業事業体がある。このような先進的な経営体（事業体）の現状について学ぶことは、将来の農林業経営を考える基礎となる。本科目では、経営体の事例を交え、経営作物ごとに先進経営体の現状を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>( ① 多々良明夫/3回) 果樹の先進経営体の現状</p> <p>( ② 祐森誠司/3回) 畜産の先進経営体の現状</p> <p>( ⑦ 平岡裕一郎/3回) 森林事業体の現状</p> <p>( ⑬ 佐藤展之/3回) 花卉の先進経営体の現状 (静岡県東部地区・中部地区・西部地区)</p> <p>( ⑯ 杉山恵太郎/3回) 野菜の先進経営体の現状</p>	オムニバス方式
		県外農林業事情	<p>静岡県外には、グローバル化の進展や規制緩和、消費者の食の安全・安心の高まりなど、時代の要請を的確に捉え、積極的に挑戦している力強い経営体が数多く存在する。また、静岡県は、関東圏の市場に向けて農産物を出荷することが多く、これらの市場の動向は今後の販売戦略を考える上で重要である。本科目では、今後の農林業経営を考えるため、静岡県外の先進的な経営体、全国的な市場を訪問し、農林業の最新の状況を学ぶことを目的とする。</p>	集中
		海外農林業事情	<p>日本国内の人口減少によって食料の国内需要は減少する一方、世界では人口が増加し、世界需要の増加が見込まれている。このため、国では農林水産物・食品の輸出を促進している。農林業者が輸出に取り組むためには、輸出を行うための基本知識やグローバルマーケットの戦略的な開拓が必要であり、海外の農林業事情を把握することが必要となる。本科目では、海外の先進的な経営体や農林業関連企業などを訪問し、海外の農林業の最新の動きを学ぶことを目的とする。</p>	集中
		農林業のための基礎数学	<p>数学は自然科学と社会科学に含まれる全ての学問分野の基礎となっており、生物のメカニズムの理解、実験に計算や比較、経営分析など、様々な場面で数学の基礎的知識が必要となる。本科目では、微分積分学と線形代数学を中心に学ぶ。初学者でも学習に入りやすいよう集合と写像、理論の基礎から始める。次に関数に関する初歩事項を「数列と極限」から「微分積分」の基礎まで学ぶ。最後に、線形代数として平面ベクトルと直線、行列と行列式の基礎事項を学ぶ。</p>	
		農林業のための生物学	<p>農林業の基礎理論を学ぶ上で生物学は、その基盤として重要な科目である。生物学とは命ある物に共通する点、異なる点を明らかにすることの追究により進展してきた学問である。追究の過程では生命現象の詳細が明らかとなり、技術の進歩によりこれら現象に人類の意図を組み込むことも可能となっており、医学や農学の進歩を支える基盤となっている。本科目では、職業専門科目の理解に役立つべく細胞、細胞分裂、受精、発生などの生物学の基礎知識の習得と、生物学の面白さ、大切さを理解することを目標とする。</p>	
		農林業のための化学	<p>化学は生活の身近なところで役立っている。特に、農林業で扱う生物の生命は多くの化学反応によって維持され、また、生産のために農薬、肥料など様々な化学物質が使用されている。本科目では、農林業を営むためだけでなく、日常生活でも関係する化学反応を理解するため、原子の構造と化学構造、化学式の意味、化学反応の量的関係、化学反応速度、酸塩基と酸化還元など化学的知識を、具体的なトピックスを持ち込んだ実践的な講義を通じて学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 農林業基礎	農林業のための物理学	物理学は自然科学の中でもっとも基礎的な学問の一つであり、広い範囲の関連分野に物理学の成果や手法が応用されている。物理学の基礎知識を身に付けていれば、さまざまな現象を定性的・定量的に捉えることができるようになる。現象の理解とともに身につけた物理学の知識は、幅広く農林業現場で生かすことができるものとなる。本科目では、農林業に活用するという視点に立って力学の基本的なことがらなどを学び、現場での判断や工夫に役立つ物理学的なものへの捉え方を身につける。	
	農林業のための地学	自然環境と調和した農林業を営むため、また内的営力、外的営力を強く受ける地球最表層部で安心、安全に暮らしていくために必要となる地学の基礎知識を、気象学、水文学、土壌学、地質学、地形学等の幅広い分野と関連させながら学ぶ。 太陽系の中の地球、大気の大気放射収支、水循環と水収支、降水、蒸発散、土壌水と地下水、地表水、土壌の生成、風化、土の理化学性、地球内部の構造、地震と地震災害、火山活動と火山災害、火成岩、堆積岩、変成岩、地質構造、地盤と地形、日本列島の歴史、日本の天気、気象災害など	
	分子生物学	20世紀中頃に生物の遺伝情報をコードするDNAの構造が解明され、21世紀に入ると様々な生物のゲノム情報の解明が進むことにより、生理、生態、発生、行動、遺伝、進化といった生物に関わる様々な現象が分子レベルで明らかにされるようになってきた。したがって、分子生物学は生物に関わる多くの分野において必要とされる基礎知識となっている。本科目は、細胞をベースにDNA、遺伝子、タンパク質の構造や機能を理解し、生命現象を分子レベルで考察するために必要な知識を修得することを目標とする。	
	農業気象学	(概要) 農林業は、自然環境下で営むもので、気象の影響を強く受ける。このため、気象と生物の生育や気象災害との関係を理解し、経営に取り組むことが大切である。近年の気象変動による山林の災害の現状、農林業生産で必要となる、施設園芸内の環境を含めた微気象の知識、また、近年の台風等による農業施設の強風被害とパイプハウス等の補強技術など気象災害とその対策など農林業生産で必要となる知識を習得する。  (オムニバス方式/全15回) ( ③ 逢坂興宏/2回) 森林山地における水文・気象現象、気象災害 ( ⑬ 長藤亮彦/2回) 園芸施設の気象災害対策 ( ⑭ 佐藤展之/4回) 耕地の微気象、環境と植物反応、園芸施設の構造と環境計測、施設園芸における環境制御 ( ⑳ 中野敬之/7回) 農業と気象、農業気象災害とその対策(茶)	オムニバス方式
	生命科学	(概要) 「生命」とは何か。農林業では様々な生物を扱っており、「生命」とは何かを理解することは、農林業を営む上で重要である。本科目では、「生命」について理解するため、生命を構成する細胞と、細胞の基本構造、生体内での化学反応に不可欠なタンパク質、遺伝的多様性、遺伝と遺伝子発現、生命活動や生命の制御について学び、生命科学の基礎を理解する。  (オムニバス方式/全15回) ( ⑧ 丹羽康夫/10回) 細胞とその構造、細胞の化学物質、タンパク質、生命活動と生命の制御機構 ( ⑨ 太田智/5回) 遺伝と遺伝子	オムニバス方式
	野生鳥獣管理・利用論	野生鳥獣による農作物被害金額は、平成28年度が172億円と高い水準にあることに加え、鳥獣被害は営農意欲の減退や耕作放棄の要因となっており、数字に表れる以上に深刻な影響を及ぼしていると考えられる。 この講義では、鳥獣被害対策の現状と課題、国の施策の方向などについて理解を深めるとともに、事例をもとに、環境管理による「鳥獣被害に遭いにくい」地域づくりの手法について学ぶ。また、獣種毎に、防護柵の設置や駆除の方法、など具体的な被害対策の手法について学ぶ。さらに、野生鳥獣の肉・皮などの利用についても、その持続的な活用方法を学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目	生産理論（共通）	農林業生産理論 (概要) 持続的農業を展開するためには、植物の生理生態、畜産物の機能と特徴の理論を学び、生産に結びつける必要がある。本科目では植物の生理生態、作物の生産に関わる温度や光条件などの環境条件や、耕起、施肥など総合的作物管理を学ぶ。また、木材の科学的性質を理解した上の持続的林業生産、畜産業における遺伝、繁殖、飼養などの専門領域を理解した上での畜産生産と環境負荷物質を制御するための持続可能な畜産業など、農林業生産理論を学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) ( ② 祐森誠司/4回) 家畜生産の目的・特徴・増殖技術、畜産物の機能と特徴、畜産経営 ( ⑦ 平岡裕一郎/4回) 生物資源としての林産物とその利用、木材の構造、木質のバイオメカニクス、樹実類と樹脂類 ( ⑬ 佐藤展之/3回) 植物の構造・発生・分化、生理生態機能 ( ⑯ 杉山恵太郎/4回) 作物の起源・分類と栽培	オムニバス方式
		環境保全型農林業論 (概要) 農業の生産性は、化学肥料や農薬の施用等により、大幅な向上が図られてきた。しかし、効率追求や不適切な資材利用・管理が農業生産活動が環境へ負荷の原因となっている場合もあり、環境負荷に少ない農業への注目が集まっている。本科目では、農業のもつ自然循環機能を活かし、生産性との調和等に留意した環境保全型農業の実現に向けて様々な知識と技術を学び、今後の農業のあり方について考える。併せて、国土保全や生物多様性に配慮した森林施業についても学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) ( ⑫ 貞弘恵/2回) 畜産と環境問題 ( ⑮ 小澤朗人/6回) 環境保全型農業とは、環境保全型農業の取り組み事例、化学農薬低減技術 ( ⑳ 片山信也/4回) 畜産堆肥を使った土づくりと化学肥料低減技術 ( ㉓ 鶴飼一博/3回) 森林の公益的機能と森林施業	オムニバス方式
		農林業のための先端技術 各種センサー、モニタリング手法、AI（人工知能）、ロボット等の技術について技術革新が進む中、農業においてもこれら情報科学と農業科学の融合が求められている。これは経営の大規模化、軽労化技術や安全な農産物への要望、気象災害の増加に対して、従来の経験知や労働集約型管理による農業から、情報処理・機械制御技術を活用した農業への変換であり、その適用場面も施設栽培だけでなく土地利用型農業にも及んでいる。また、我が国では実用化はされていないものの、多収やストレス耐性の強化等を目標とした遺伝子組み替えに関する研究が進められており、温暖化や水不足の深刻化が予想される中、農業生産の安定化の手段として有望視されている。本授業では、これら先端技術の導入や研究開発を学ぶことで、将来の農業経営に資する。	
生産理論（栽培）	作物学 農作物は、大きく食用作物、飼料・緑肥作物、工芸作物に分けることができる。このうち、水稻、麦類、トウモロコシ、豆類、イモ類などの食用作物は、エネルギー、蛋白、油脂源として人間の生存や活動に不可欠な主食となる作物である。また、静岡県の主要産品の茶は、工芸・嗜好作物として私たちの生活に潤いを与え豊かなものとしている。本科目では、我が国で最も重要な普通作物である水稻について、起源と分布、品種、形態と生育、生産環境と生産の阻害要因、栽培管理技術について体系的に学習する。また、麦類、トウモロコシ、大豆、茶については、種類、用途、栽培管理技術などについて基本的情報と、環境負荷の軽減、土地・養分等の資源の持続的利用のための作付体系に関する知識の習得を行う。さらに、精密農業は作物の生理・生態的基礎的知見や位置情報に基づく情報集約型の新たな栽培管理法である。そこで、作物の生育ステージ、バイオマス量、ストレス反応を的確に把握するための、指標、センサー・プラットフォーム、データ処理法、情報の活用が見込まれる農作業や適用場面、精密農業向け機械装備、等について学習を進めるとともに、精密農業の実践例をもとに今後の展開について議論を行う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 生産理論（栽培）	園芸学	<p>(概要)</p> <p>静岡県は、イチゴやトマト、レタスなどの野菜、ガーベラやバラなどの花き、ミカンなどの果樹など園芸作物の栽培が盛んな県であり、これらは本県の主要産品となっている。本科目では、園芸の起源と歴史、園芸作物の成長と形態、養分吸収・光合成と転流・利用、環境制御、繁殖と改良に加え、園芸作物がもつ癒しなど機能など、園芸作物の栽培ならびに生産物の取扱いの基礎となる園芸学全般について学ぶ。また、園芸作物は化石燃料使用する品目もあるため、環境に配慮した栽培についても考える。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(① 森口卓哉/5回) 果樹園芸の特徴、果樹生産の現状と環境、果樹の利用・分類・形態・器官・機能、果実の発育・成熟</p> <p>(⑬ 佐藤展之/5回) 花き園芸の歴史・文化と環境、花きの分類・栽培・育種、施設園芸と環境制御</p> <p>(⑯ 杉山恵太郎/5回) 園芸の起源・歴史、野菜の分類・生長・形態・育種、野菜栽培の基礎と実際</p>	オムニバス方式
	園芸学各論	<p>(概要)</p> <p>野菜、果樹、花きなど園芸作物は、様々な技術開発により高品質な生産物が安定的に生産されている。本科目では、園芸作物の専門的な知識を得ることを目的とし、各論として野菜園芸ではトマト、イチゴ、温室メロン、タマネギなど、果樹園芸では温州ミカンやカキ、ナシなど、花き園芸ではガーベラやバラ、キクなど、静岡県特産物を例にとりながら、それぞれの生理特性と栽培方法、およびそれらに関与する諸問題について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(① 森口卓哉/5回) 果樹の種類と栽培、果樹栽培における生育調節剤利用、育種・繁殖、品質制御技術</p> <p>(⑬ 佐藤展之/5回) 花きの種類と栽培、花き栽培における土壌・栄養・養液栽培、生育・開花調整、鮮度保持と貯蔵・輸出入</p> <p>(⑯ 杉山恵太郎/5回) 野菜の種類と栽培、野菜栽培における作型、鮮度保持と流通</p>	オムニバス方式
	植物病理学	<p>植物の病害は、様々な微生物によって引き起こされる。日本は元々高温・多湿条件が続きやすい気候であることから、病害虫の発生やそれらによる被害が大きいのに加え、農産物に高品質を求める傾向が強いことから病害虫防除無しでの栽培が非常に困難な状態にある。さらに、現在のように国際的な物流や人の行き来が盛んになると、その移動にもなって植物の病原体が移動し、以前には見られなかった様な大規模な被害をもたらすことがある。これらの被害を防ぐためには、病原体の特徴と防除方法の知識は不可欠である。本科目では、主な病原体である糸状菌・細菌病・ファイトプラズマ病・ウイルス病・ウイロイド病の特性、病気の伝染経路や診断方法等について学ぶ。なお、現在は、単に防除効果があるだけでは受け入れられない社会情勢になっており、環境にも十分に配慮した防除方法が求められている。このことから、IPMの実践や化学農薬以外の防除方法についても積極的に紹介する。</p>	
	応用昆虫学	<p>人間社会とのかかわり合いながら生活している昆虫のなかには益虫もいれば害虫もあり、前者は植物の受粉や害虫の天敵としての生物的防除など有用資材として使われ、後者は食糧増産や保健衛生の立場から防除の対象とされてきた。本科目では、昆虫の形態や生理生態などについて学び、害虫の防除手法について化学的防除、生物的防除、物理的防除など様々な手法を学び、それらを要素技術とする環境に配慮したIPM(総合的有害動植物管理)について考える。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目	生産理論(栽培)	土壌肥料・植物栄養学 (概要) 土壌は農林業に利用されるだけでなく、地球環境保全にも欠かせないものである。土壌の概念や、土壌の三層構造や化学的組成などに加え、農耕地の土壌の現状や環境問題など農林業生産に必要な土壌の基礎知識について学ぶ。また、植物を主体とし養分吸収特性及び植物生産の代謝との関連、植物が成長するために必要な養分の機能、その養分の吸収・移動の機構、植物の栄養特性、肥料の種類と特性について学ぶ。近年肥料と環境の問題が取り上げられることが多いため、環境負荷の少ない施肥方法についても考える。  (オムニバス方式/全15回) (13 佐藤展之/8回) 植物栄養と養分の吸収機構、多量要素・微量元素の生理学的役割、肥料と施肥、環境・農業と肥料、栄養診断 (14 外側正之/7回) 土壌の化学性・物理性、土壌構造、土壌微生物、土壌診断	オムニバス方式
		植物遺伝育種学概論 植物育種は、生産性向上など人類にとって大切な役割を担っている。その技術は、各作物の性質、繁殖様式、開花特性などを巧みに利用し、様々な育種法が研究開発されてきた。また、育種を支える基礎科学が植物遺伝学である。本科目では、前半で遺伝のしくみや遺伝子とゲノムなど育種に必要な基礎知識について学ぶ。また、後半は交雑育種、突然変異育種、栄養繁殖植物の育種など育種の基本的な技術について学ぶ。また、植物の遺伝・育種における生物工学の基礎も合わせて学ぶ。  (オムニバス方式/全15回) (9 太田智/8回) 植物の遺伝、植物の遺伝・育種における生物工学の基礎 (26 稲葉善太郎/7回) 栽培植物の起源、植物の育種、遺伝資源の活用	オムニバス方式
	森林計画・政策論 (概要) 森林は、多面的機能の発揮を通じて、国民が安全で安心して暮らせる社会の実現や、木材等の林産物の供給源として地域の経済活動と深く結びつくなど、さまざまな働きを通じて私たちの暮らしを支える大切な存在であり、森林を保全し、長期的視点に立った計画的かつ適切な森林の取扱いを推進することが必要である。本科目では、森林政策の歴史、森林政策の骨格をなす森林関連法、森林計画制度等の基本的事項を学ぶ。さらに、諸外国の森林政策から、持続可能な森林経営に向けた森林認証制度を学ぶとともに、地球環境問題等の各国の共通性、独自性を学ぶとともに、新たな政策課題についても考察する。また、これらの森林計画策定に必要な森林の現況調査、森林管理における地理情報システム(森林GIS)と森林・林業分野のICT利活用、UAVや衛星画像等を用いたリモートセンシング技術等について学ぶ。  (オムニバス方式/全15回) (3 逢坂興宏/7回) 森林調査の方法論 (7 平岡裕一郎/3回) リモートセンシング技術 (22 近藤晃/5回) 森林政策の歴史と制度	オムニバス方式	
生産理論(林業)	造林学	木材供給、水土保全、保健休養、CO2吸収等の森林が私たちにもたらす恩恵である多くの生態系サービスを将来にわたって享受するためには、森林を健全に保全すると共に、その持続的な循環利用(伐採、植栽、育成・保全)を図る必要がある。本科目では、造林学の基礎となる森林づくりの原理・原則、並びに森林づくりのために行われる各種作業(地拵、植栽、下刈、除伐、間伐等)の目的や方法を学ぶ。また、広葉樹林、針広混交林、複層林等、多様な森林づくりの目的とそれに対応した施業技術について学ぶ。さらに森林景観を科学する森林風致学を概説する。	
	森林土木学	森林土木学は治山・砂防分野と林業土木分野からなる。治山・砂防分野では、森林山地斜面で発生する土砂移動現象(表面侵食、斜面崩壊、地すべり、土石流等)の発生メカニズムとその対策、および森林植生の有する表面侵食防止、表層崩壊防止の機能とその限界、荒廃地の復元技術および森林・植生がもつ環境保全機能と景観形成機能についての知識と最新の技術を学ぶ。林業土木分野では、木材生産システムの集材工程に大きくかわる林内路網整備に関する知識(林道、森林作業道開設の目的、役割、構造等)、設計手順、現地踏査についての知識と最新の技術を学ぶ。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	生産理論（林業）	木質科学概論	樹木が生産する木質バイオマスは、地球上に最も豊富に存在する有機資源（バイオマス）である。木質バイオマスの持続的生産と利用を実現するためには、樹木の適切な管理だけでなく、木質を生産する樹木の特徴も理解する必要がある。本科目では、生物学、化学、物理学、材料学、環境学のあらゆる側面から見た木質バイオマスの特徴と実際の利用について概説する。講義を通じて、私たちは木質バイオマスをどのように扱うことで「有効利用している」と言えるのかを考える。	
		木材生産システム	（概要） 森林・林業の重要な担い手である森林総合監理士（フォレストラー）や森林施業プランナーは、林業活性化構想等の策定や森林経営計画の樹立支援等の役割を担っている。本科目では、木材生産（伐採・搬出）に関する理論、丸太の造材や材積計測、価格形成の背景・要因、木材生産活動における自然環境に配慮した作業システム構築（車両系、架線系）、林業機械の構造・性能・整備・取扱方法、原価計算などの知識を学ぶ。さらに、森林経営計画の作成に必要な関連法、政策、森林の現況把握、森林管理の様々な施業法の理論と技術等を学ぶとともに同計画作成を演習する。なお、林業は労働災害の発生率が他産業と比較して高いことを踏まえ、林業・林産業の労働災害の現状やその対策を学ぶ。  （オムニバス方式/全30回） （①⑦ 池田潔彦/ 5回）木材加工システム （②② 近藤晃/20回）森林経営と森林管理、森林経営計画 （②⑤ 鶴飼一博/ 5回）森林における作業システム	オムニバス方式
	生産理論（畜産）	飼料総論	動物が健全に生産活動を営む上で要求する栄養素を提供する物であり、嗜好に見合うとともに経済的に低価格であることが好ましい。本科目では、生産物に成分が反映されるため、動物性食品への安全保障が重要である事を理解するとともに、自給飼料を生産する草地での土地利用の特徴や、草地の維持管理の基礎的な理論、実際の管理技術と生産される牧草の保存、活用について教授する。また、各単味飼料の特徴を知った上で、動物が利用するうえで、消化吸収が円滑に進むように加工することや組み合わせる（配合する）ことで養分要求量の充足を図ることなどを理解し、実際に飼料配合計算を行う。	
		家畜生理解剖学	家畜の飼育に当たっては、それぞれの家畜の成育や繁殖の仕方、生産の仕組みをよく理解し、その家畜の特性にあわせた飼料給与や飼育管理を行う必要があり、家畜の体のつくりや各臓器の生理機能を理解する必要がある。本科目では、動物体を構成する骨格系、筋系、消化器系、泌尿器系、呼吸器系の名称、解剖学的構造、位置関係についての基礎的知識の習得、動物間の差異について学ぶ。また各器官および系が担う機能・生理について組織、細胞レベルの構造と対応させて理解する。	
		家畜育種繁殖学	家畜は、人間の利用目的に適するように形質・能力をもつように遺伝的に変化させられてきた動物であり、生産能力や繁殖性、抗病性などの点で特徴をもった様々な動物種の様々な品種の家畜が育種されてきた。また、家畜を繁殖させる場合は、より経済性の高い家畜がその対象となるため、家畜の改良を常に意識して繁殖させる必要がある。本科目では、優良家畜の選抜・交配方法などの育種の基本的知識・理論や、繁殖に関わる様々な事象、繁殖の人為的制御技術を理解することを目的とする。	
		家畜飼養学	牛や豚、鶏などの家畜飼育にあたっては、家畜の維持、成長、生産活動に必要な栄養素の要求量に影響する環境要因について考慮し、物質とエネルギーを効率的に動物生産物に転換することを理解することが重要である。本科目では、畜産業の目的である動物生産物を効率良く獲得するために、基礎として動物の種や成長過程における飼料消化性の違いや環境要因による変化について知り、応用内容として環境負荷物質を含む排泄物の成分制御法や労働の負担低減を図る自動給餌やロボット搾乳などの先端技術の導入是非などを学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	生産理論（畜産）	畜産法規	畜産経営には様々な法規が関係しているため、畜産に携わる者には、畜産に関係する法規の知識と理解が不可欠である。本科目では、家畜改良増殖法や酪農肉牛生産振興法などの畜産振興に係る法規、国内畜産保護のための国境措置に関する法規、家畜伝染病予防法などの家畜衛生に関する法規、食品衛生に関する法規に加え、流通飼料や畜産環境、価格対策に関する法規など、多岐にわたる畜産関係法律の概要を理解し、畜産経営に必要な法律知識の習得することを目的とする。	
		人工授精論	家畜人工授精は、優良な種畜の精液を効率的に利用することにより家畜の改良増殖を推進するものであり、きわめて有効な手段である。また、家畜人工授精技術には実施者や実施場所等に関する規制がある。本科目では、家畜人工授精の意義や現況に加え、精液採取、検査、処理・保存、輸送、注入等の方法と理論など家畜の人工授精技術や規制等について学習する。また、ウシやブタの胚移植や胚の凍結技術についても学習する。	
		家畜衛生学	家畜衛生の最大の役割は、家畜を病気から守り、健全な家畜から生産される畜産物を食卓に届けることである。その役割を果たすには、家畜の病気にはどのようなものがあるか、どのように感染・発症するかを知り、それらの病気を予防・防除するにはどのような飼養管理や衛生管理を行わないといけないかの方策を立てることである。また、それらの方策を立てるには、獣医師や家畜保健衛生所との連携が大切であり、関連法規も知っておく必要がある。本授業では、畜産現場において必要な家畜衛生に関する一連の知識を学ぶ。	
	経営管理	簿記基礎	企業の経済活動は、複式簿記の技術を利用して貨幣金額により測定・記録・計算されており、経営状況を理解する上で欠かせない知識となっている。本科目では、仕訳と勘定、簿記一巡の手続き、基本的な商品売買、試算表の作成方法、決算整理、精算表・損益計算書・貸借対照表の作成方法など、基礎的な商業の簿記原理と記帳、小企業を想定した決算に関する初歩的な実務を理解することを目的とする。講義の中で多くの演習問題に取り組み、実践的な能力を養う。	
		簿記応用	近年、農林業の規模拡大が進んでおり、中小規模の企業の経営状況を把握できる経営知識が求められるようになってきている。本科目では、これまでに学んだ複式簿記の原理の知識を基に、各勘定科目の意義と記入法、決算手続きなどの商業簿記の発展的な知識と、初歩的な原価計算を含む工業簿記の知識を学び、中小規模の企業を想定した簿記の実務を習得することを目的とする。講義の中では、多くの演習問題に取り組み、実践的な能力を養う。	
		フードシステム論	農業・農村の持つ多面的な役割・機能を担う日本農業に対する期待は、近年において一層の高まりが確認できる。それは、食料自給率の向上や食料の安全・安心への高い期待の高まり、地産地消・スローフード運動の広がり、持続可能な循環型社会の形成の必要性に対する認識の高まり等である。その一方で、食料生産を担う農業や食料生産の場としての農村は、過疎化や高齢化等により、持続可能性の面からみると危機的状況におかれている。また、生活様式の変化に伴い、外食や中食に代表される食の「外部化」が進み、「食」と「農」の乖離が進展している。本講義では、農産物を主体とした食料生産、食料流通、食料消費までもを含めた食料供給連鎖に関して、フードシステムの観点から現代の食料をめぐる実態と変動を理解することを、主たるねらいとする。	
経営管理論	農業経営体では規模拡大が進み組織が複雑化している。その中で、経営目的や経営戦略を確実に遂行し成果をあげるためには、経営の合理的な仕組を構築し、堅実な経営計画を策定し、その進捗状況にあわせて是正措置をとる経営管理が必要である。本科目では、経営管理の基礎理論や法人組織等における必要性が高い、経営組織、経営戦略、技術経営など、経営組織の基礎理論を、ケーススタディに基づき理解（ベンチ・マーキング的）する。			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門基礎科目	経営管理	農林業経営学	<p>(概要)</p> <p>農林業の経営体では担い手の減少や市場の国際化が進む中で、複合化・多角化や規模拡大、新規市場開拓が進められてきた。また、地域農業の組織化・システム化も展開してきている。その中で、経営目的や経営戦略を確実に達成し生産や販売の成果をあげるためには、経営の合理的な仕組みを構築し、堅実な経営計画を策定するとともに、進捗状況にあわせてそれらを適正にコントロールする経営管理が必要である。本科目では、農業経営学の基礎理論を習得するとともに、農林業経営をめぐる新たな課題解決に向け、経営学における意思決定論に基づく経営管理や、経営組織論における動機づけ理論、リーダーシップ論など経営管理の基礎理論を理解する。また、農林業経営体における事例をもとにケーススタディを行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(④ 天野哲郎/12回) 農林業経営の基礎理論、経営管理の基礎理論、ケースメソッド</p> <p>(⑪ 大石竜/1回) ケース・メソッド 野菜経営</p> <p>(⑫ 小林信一/1回) ケース・メソッド 畜産経営</p> <p>(⑳ 近藤晃/1回) ケース・メソッド 林業経営と森林管理</p>	オムニバス方式
		経営戦略	<p>変動し続ける環境に適応しながら、企業が長期的に存続していくためには、長期的視点に立った経営戦略の理論を持つことが必要である。本科目では、経営戦略に関する知識を習得することを目標として、経営理念・経営目標、環境分析、ドメイン・成長ベクトル・多角化戦略など経営戦略に関する基礎知識や、5つの競争要因と3つの基本戦略・価値連鎖・産業クラスター・競争対抗戦略など成長戦略に関する基礎知識、コーポレート・ガバナンスと企業の社会的責任、技術経営(MOT)などについて学ぶ。その際、経営戦略の基礎理論を学ぶとともに、戦略策定に有効な分析手法について習得するとともに、グループワークにおけるディスカッションにより、具体的な戦略の策定の仕方を学ぶ。</p>	
		マーケティング論	<p>売れる農林畜産物の背後には、どのような仕組みがあるのか。価格が安いだけで、農林畜産物は売れるのだろうか。生産者と小売などの流通業者との間の力関係はどのようになっているのか。広告をすれば農林畜産物は売れるのだろうか。このような疑問に答える学問が、マーケティング論である。授業では、まずマーケティングの基礎的な知識をわかりやすく説明する。そして、企業の市場参入戦略、マーケティング・リサーチ、マーケティング・ミックスに重点を置き、企業の成功例と失敗例を交えながら映像資料も大いに活用し、わかりやすく解説する。</p>	
		財務会計	<p>財務会計は、企業の財政状態や経営成績に関する会計情報を企業外部の利害関係者に報告することを目的としている。報告は財務諸表を用いて行われ、これらの基本的な知識は企業の経済活動を理解するうえで欠かせない。本科目では、財務諸表の仕組みなど財務会計の基本的事項について学ぶ。また、企業の経営状況を知るには、その企業の財務データを読み取ることが必要であることから、財務諸表の特徴と読み方や経営分析の手法を学び、企業の財務状況を分析する能力を身につける。</p>	
		管理会計	<p>企業は、社会の経済的欲求を満足させるために作り出された社会的形成体であると同時に、自らの存立と持続を実現するための経済性を追求する。管理会計はこうした企業が経営目的を達成するために行なう合理的な意思決定に役立つとするものであり、「経営管理のための会計」といわれる。本科目では、企業の利益管理を中心に、経営戦略と管理会計との関連について学ぶ。また、管理会計理論の修得と同時に、現代企業を対象にしたケーススタディを随時取り入れ、管理会計理論が実際の企業の中でどのように取り入れられ実践されているかについても学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	経営管理	農林業の経営組織論	<p>(概要)</p> <p>農業においては家族経営を主体として展開してきたが、近年、法人化や集落営農などの経営主体が展開してきた。これらの経営体では、様々な構成員の活動によって成り立っており、チームや職場という組織をいかにうまく活用して、経営成長を成し遂げるかを目的としている。また、家族経営においても個々の経営体だけで企業活動を継続できるものではなく、各種の組織に支援されていることから、経営組織論は農林業経営にとって必要な知識となっている。そこで、一般企業を対象にして展開してきた経営組織論の論理に関する基礎知識を習得するとともに、農業経営の経営形態別に組織論上の課題を具体的に考察する。</p> <p>また、近年は株式会社等が過度に効率性・合理性を追求することで、世界経済に混乱をもたらし、貧富の格差拡大や自然環境への過大な負荷などの問題も顕在化してきている。こうしたなかで、協同組合が、その掲げる理念とともに世界的に再評価されている。そこで、株式会社等と対比しながら、協同組合の基本特性、意義や役割、それを担保する協同組合原則について学ぶとともに、協同組合運動と事業の展開について学ぶ。さらに、農業分野で関連の深い農業協同組合の理念や組織、事業展開と今日的課題について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)  (④ 天野哲郎/9回) 経営組織論の理論と課題  (⑬ 柴垣裕司/6回) 協同組合の基本特性、意義や役割、協同組合原則</p>	オムニバス方式集中
		労務管理	<p>農林業経営体において雇用する場面が増えているが、労働者が安心して安全に働けよう、雇用者として労働関係法令の内容を正しく理解する必要がある。本科目では、労働者を雇用する際に必要となる労働法の知識、労働者を雇い入れる際に必要となる労働契約や就業規則、各種保険と年金制度、賃金や労働時間・休暇・休日、労働安全・休日などの労働条件のルール、退職や解雇などの労働関係が終了するときの手続きなど実務に必要な知識を学ぶ。</p>	
		人材マネジメント	<p>企業はヒト・モノ・カネ・情報の4つの経営資源から成り立っており、このうちのヒトに関する企業の管理が人的資源管理（HRM）である。本科目では、日本の労働市場や、人的資源管理の位置づけ、採用管理や配属と異動の管理、教育訓練、人事評価など人的資源管理をめぐる基本的な考え方を学ぶとともに、具体的なトピックスにも触れながら、日本の人的資源管理の現状と課題について体系的に学び、農林業経営体で必要な人的資源管理について考える。</p>	
		知的財産権	<p>近年、知的財産の戦略的な創出と活用が企業経営の機能としてしめる意義がますます高まっている。現在の農林業経営では、知的財産に係わる場面も多く、知的財産に関する知識は必要不可欠である。本科目では、特許権や実用新案権、品種登録に係る育成者権、著作権、製品企画・販売戦略に係る商標権、農業で活用される地域団体商標など、今後の農林業経営に生かすことの出来る知的財産権の基礎知識を習得することを目標とする。</p>	
		農と食の起業論	<p>地域活性化の一環もあり農業や食料に関わるビジネスの起業や新規就農者の増加が、農林水産統計で確認できる。なかでも、起業には様々なリスクが伴うため、起業にあたっては情報収集を綿密に行う必要がある。本講義では、農業や食料に関わるビジネスを起業したり、就農したりする際に必要となる知識やノウハウ、考え方を習得し、起業に必要な基礎知識を体系的に学ぶ。さらに、農業や食料関連ビジネス起業者を招聘し、起業の背景や理由、経営理念、起業のステップと各ステップごとの課題と対応策、起業に必要な諸要件などを学ぶ。それら先進事例に関して、受講生のグループ・ワーク等で多角的に学ぶことで、ビジネスプラン策定に関わる知識やノウハウの獲得を図ることを、本講義の主たるねらいとする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
経営管理	経営実習Ⅰ	農林業経営体では、生産現場が「企業の売上を稼ぐ部門」であり、農林業経営体の利益に直接的な影響を与えている。このため、農林業経営体の持続と、さらなる発展のためには、生産部門の安定と効率化が不可欠である。本科目では、先進的な農林業経営体の生産現場で実習を行い、これまで学んできた知識を使いながら、農林業経営体の持続と発展に向けた効率的な人員配置、適切な生産資材の利用、生産情報の収集と利用法について学ぶことを目的とする。	
	経営実習Ⅱ	人手不足や少子高齢化など農林業経営体が直面する経営環境は変化し続けており、その中で企業が継続事業体として自らの成長と発展を実現させていくためには、優れた経営感覚や経営戦略、それにもとづく戦略的経営の実行が不可欠である。本科目では、農林業経営体の経営部門や、加工部門、流通部門、販売部門などの部門で実習を行い、これまで学んできた知識を使い、農林業経営体の経営戦略と戦略に基づく経営について学ぶことを目的とする。	
職業専門科目	食品科学	近年、食の安全性など食にまつわる様々な課題、問題が噴出しており、消費者の関心が高くなっている。農林業経営では食品に対する幅広い正確な知識、食品安全、健康に生活していくための栄養バランスのとれた食品の摂取に関する知識が不可欠である。本科目では、食品と健康とのかかわりや機能、食品の主要成分や特殊成分、食品成分の酸化や成分間反応、食品の貯蔵、食品安全をリスク学の視点から考えるための基礎知識や、化学物質および微生物からの食品汚染、最近注目が高い特定保健用食品や機能性食品、HACCPについての最新情報など、食品化学や食品衛生の基礎知識や先端的な内容について学ぶ。	
	収穫後生理学	農産物の、収穫から消費に至るまでの、追熟・老化に関する特性を、生理学的に説明する。特に野菜や果実、切り花などの園芸作物は、収穫後、急速な代謝変動を伴い成熟・追熟・老化するが、これにはエチレンが深く関わっている。本科目では、園芸作物の老化に作用する、エチレンの作用・生合成・調節機構について説明するとともに、園芸作物の収穫から消費までの期間における、品質保持技術・貯蔵方法・加工に関わる基礎知識について解説する。	
	木材利用・流通論	林業の主要な生産物である木材は、建築材料や家具など様々な用途に、その特性を生かして加工・利用されている。本科目では、木材の特性と加工・利用の関係を理解することを目的とする。まず、木材の物理的性質や木材の保存、木質材料の製造と2次加工など木材に関する基礎知識を学ぶ。次に、世界の木材需給と流通、日本の木造住宅における在来工法、枠組壁工法等の特徴について学ぶ。最後に、林業にとって市場に出す最初の製品である丸太の商品力を高め、採算性を高めるための工夫や、木材の種類・生産工程・用途等の違いによる流通の形態や変遷、木材市場の役割・動向、IoT、ICTを利用した木材流通について学ぶ。	
	食品流通論	高度経済成長以降、女性の社会進出や家族世帯員数の減少、食品関連産業の発展等を背景として、日本の食生活は、外部化および洋風化等が進展し、大きく変化した。外部化や洋風化の影響により、生産者から最終消費者までの距離は長くなるとともに、食品の供給ルートは複雑化し、流通が果たす役割が大きくなっている。本科目では、高度経済成長期以降変化してきた食生活の実態や、食品流通の機能や構造を理解するとともに、消費者に安全・安心な食品を安定的に届けるための流通システムのあり方について考える。	
	農と食の健康論	(概要) 「食」は私たちの「健康」に大きな影響を与える。一方で「食」は農業生産によって生み出されるため、「農」と「食」は密接な関係にある。本科目では、食が健康に与える影響、並びに、最近注目を集めている食品や農産物の機能性成分の種類や、その働きを学ぶ。特に、柑橘類や沢ワサビなど、県・地域の特産物を通じて食品の機能性を身近に捉え、これらと健康との関係を考察する。また、日本および諸外国の農業、気候、農作物と食文化から健康を考える。  (オムニバス方式/全15回) (① 森口卓哉/8回) 機能性成分の働きと機能性成分をもつ食品・農産物 (⑬ 内藤博敬/7回) わたしたちの食と健康	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	加工・流通・販売	6次産業化実践論	6次産業化とは、第1次産業の農林魚業、第2次産業としての製造業、第3次産業としての小売等の事業者が連携し、地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取り組みである。地域と連携し、カネとモノの世界だけではなく、地域のつながりやコトの世界を重視していくことが重要である。本科目では、6次産業化をとりまく市場条件、6次産業化の主体や場の条件、倫理や戦略を相互に関連付けて、6次産業化の方向性や可能性について具体的な事例を示しながら考えることを目的とする。	
		食品加工実習	食品加工技術を用いることで、農畜産物の栄養性や嗜好性、保存性を向上させることが出来る。本科目では、農畜産物の栄養性や嗜好性、保存性を向上させる様々な加工技術、農畜産物の加工法や保存法、包装法、さらに、食品別の規格基準や、健康や栄養に関する食品表示制度について学ぶ。また、農畜産物の原料処理、加工方法、各工程における機械の操作、包装方法、殺菌方法などの食品加工技術および原理を体得すると共に、食品工場における衛生管理、工程管理、製品管理等の基本を学ぶ。	共同 ※講義 16時間 ※実習 44時間
		木材加工実習	(概要) 木材は、構造材料あるいは強度部材として利用するため、木材の物理的性質や力学的性質等を把握することは重要である。本科目では、切削加工から人工乾燥等の製造技術及び品質管理手法や、合板・集成材等の製造・性能特徴に関する基礎知識、木造住宅や木造建築の合理化手法や、耐久性・耐火性を向上する手法について学ぶとともに、木工作品の製作を行うことで、設計の仕方、作品の製図作成、木材加工の機械や道具の使い方、作成手順、安全作業など木材加工に必要な知識と技術を習得する。  (オムニバス方式/30回) (17) 池田潔彦/14回) 製材・機械加工、木材の乾燥技術及び物理的・強度的性質、木質材料の種類と特徴 (29) 星川健史/16回) 木工具・木工機械の種類と管理方法、木工作品の製作	オムニバス方式 ※講義 28時間 ※実習 32時間
		販売管理実習	マーチャндаイジング、ストアオペレーション、販売管理の知識を学びながら、マーケティング戦略に沿って農林畜産物を販売するための方法を学ぶための実習を行う。本科目では、農林畜産物を販売するための経営手法を理解した上で、販売管理のノウハウを修得し、販売の技術を身に付けることを目標とする。まず、どのような製品を、いくらで、どこで販売し、どのような宣伝を行うかのマーケティング戦略の手法を理解し、商品計画、価格設定、在庫管理などの商品知識を深める。そして、ストアオペレーション、販売技術、販売管理のノウハウを修得し、顧客情報の収集法と分析、顧客の管理などの手法を身に付ける。	共同 ※講義 8時間 ※実習 52時間
	生産技術	総合実習	(概要) 水稲、茶、野菜、果樹、花卉、畜産、林業の生産管理に関わる知識や技術を学ぶため、実習や生産現場の見学を通じ、農作業安全や農業現場に即した農業の実学の基本を学ぶ。また、これらの実習等を通じて、農林業を総合的に理解する能力と態度を養う。また、畜産関連施設や、ICTやIoTを活用したスマート農業の視察を通じ、農林業の先端技術の現状について学ぶ。  (オムニバス方式/全30回) (9) 太田智/4回) 果樹栽培：果樹の樹種別の枝管理と着果管理、接木・挿し木 (10) 相蘇春菜/2回) 林業：木材の樹種同定 (11) 大石竜/2回) 野菜栽培（施設）：環境制御システムの利用法 (12) 貞弘恵/4回) 畜産：酪農施設、乳業メーカー見学 (23) 中根健/2回) 作物栽培：田植え (23) 中根健、27) 増田壽彦、28) 坂口良介/4回) (共同) 農作業安全：危険箇所・危険作業の確認、刈払機・運搬車の講習 (24) 中野敬之/4回) 茶栽培：摘採、製茶 (26) 五十右薫/4回) 花き栽培：播種、鉢上げ、収穫・調整 (27) 増田壽彦、28) 坂口良介/4回) (共同) 野菜栽培（露地）：露地野菜の栽培管理、スマート農業の視察	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	生産技術	圃場実習（栽培）	<p>(概要)</p> <p>栽培の全般について理解するため、作物、野菜、果樹、花の栽培管理の実習とともに、簡易な成長調査、病害虫診断、収穫物の調査を行う。これらの実習を通じて、生育管理、病害虫管理、肥培管理の基礎を学ぶとともに、環境に配慮した農業のあり方を学ぶ。また、成長に伴う生育調査、病害虫診断の技術、収穫物の調査を通じた選果や選別の技術について学習する。</p> <p>(オムニバス・共同方式/全30回)</p> <p>(⑨ 太田智、39 山家一哲/6回) (共同) 果樹：温州ミカンの収穫、調整、出荷</p> <p>(⑪ 大石竜、⑳ 増田壽彦、㉘ 坂口良介、/6回) (共同) 野菜：露地野菜、果菜の定植、栽培管理、収穫、出荷調整</p> <p>(㉓ 中根健、42 吉村親/6回) (共同) 作物：水稻の収穫、</p> <p>(㉔ 中野敬之/6回) (共同) 茶園の栽培管理、茶加工</p> <p>(㉖ 五十右薫/6回) (共同) 花：切花の収穫、調整、出荷</p>	オムニバス方式・共同
		圃場実習（畜産）	<p>基本的な家畜の飼養管理技術について理解するため、鶏や牛などの飼養実習、簡易調査、家畜ふん尿を用いた堆肥の製造実習を行う。これらの実習を通じて、家畜伝染病予防法に基づいた管理方法や環境に配慮した農業のあり方を学ぶ。</p> <p>(鶏) 給餌、給水、清掃、衛生管理、生理学的特徴、糞便の観察、習性、鶏の保定、集卵、鶏糞処理などの一般管理</p> <p>(牛) 給餌、給水、運動、清掃、衛生管理、個体識別、生理学的特徴、糞便の観察、習性、牛の保定、頭絡のかけ方、外貌所見、測尺(体高・胸幅・胸深・尻長)、心拍数・検温・呼吸数の測定法、牛糞処理などの一般管理</p> <p>(堆肥製造) 水分管理、温度管理、切り替えしなどの一般管理</p>	共同
		演習林実習	<p>森林経営管理全般を理解するため、実習を通じて森林の調査方法、服装と道具、造林技術、森林の保護管理技術などの基礎知識や基礎技術について学ぶ。また、特用林産物の栽培実習も行う。</p> <p>森林調査：森林をつくる樹木の種類、環境、地形、土壌等の調査方法</p> <p>服装と道具：林業機械の種類と機能</p> <p>造林技術：伐採方法、枝打ち、間伐</p> <p>森林保護管理技術：生物被害と防除方法</p> <p>収穫技術：伐出技術、伐採した木材の測定</p> <p>特用林産物：シイタケの栽培</p>	共同
		生産マネジメント実習Ⅰ（栽培）	<p>生産現場の管理を行う場合には、計画（PLAN）、実施（DO）、評価（CHECK）、改善（ACTON）のPDCAサイクルを意識する必要がある。また、近年では生産現場へのICTなどの先端技術の導入が進んでおり、これらの技術を利用するための知識や技術を身につける必要がある。本科目では、計画策定に必要となる施設・圃場・作物・生産資材などの情報収集の方法、費用や利益の計算方法、先端技術の導入方法、栽培終了後の評価方法を学び、評価の結果を次にどう生かすのかを学ぶ。</p>	共同
		生産マネジメント実習Ⅰ（畜産）	<p>生産現場の管理を行う場合には、計画（PLAN）、実施（DO）、評価（CHECK）、改善（ACTON）のPDCAサイクルを意識する必要がある。また、近年では生産現場でのICTなどの先端技術の導入が進んでおり、先端技術を利用するための知識や技術を身につける必要がある。本科目では、計画策定に必要となる施設・圃場・畜種・生産資材など情報収集の方法や、費用・利益の計算方法、先端技術の導入方法、生産終了後の評価方法を学び、評価結果を次の生産にどのように生かせばよいのか考える。なお、実習はグループに分かれて行う。</p>	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 生産技術	生産マネジメント実習Ⅰ（林業）	生産現場の管理を行う場合には、計画（PLAN）、実施（DO）、評価（CHECK）、改善（ACTION）のPDCAサイクルを意識する必要がある。また、近年では生産現場への情報通信技術（INFORMATION AND COMMUNICATION TECHNOLOGY, ICT）などの先端技術の導入が進んでおり、先端技術を利用するための知識や技術を身につける必要がある。本科目では、計画に必要な経営森林の面積・森林の内容・森林の林齢などの情報収集の方法、先端技術の導入方法、費用や利益の計算方法、生産終了後の評価方法を学び、評価結果を次の期にどのように活かすべきかを考える。	共同
	生産マネジメント実習Ⅱ（栽培）	効率的かつ安定的な農業経営を行うためには生産性向上が不可欠であり、PDCAサイクルを意識した生産管理が必要である。本科目では、「生産マネジメント実習Ⅰ」で学んだ内容を踏まえ、生産現場におけるマネジメントを学ぶ。栽培する作物や栽培面積に応じた栽培の計画と、その計画に沿った時期別の栽培管理、雇用等の人員配置、肥料・農薬などの資材の使用計画などにもつぎ、収益と支出を把握し、データ等で分析を実施する。これらを繰り返すPDCAサイクルに基づき、計画と実績の比較を行うと共に成功や失敗の要因について分析し、分析結果を経営に生かす方法を考える。実習はグループに分かれて行う。	共同
	生産マネジメント実習Ⅱ（畜産）	効率的かつ安定的な畜産経営を行うためには生産性向上が不可欠であり、PDCAサイクルを意識した生産管理が必要である。本科目では、生産現場のマネジメントを学ぶ。施設規模や畜種に応じた生産計画と、その計画に沿った時期や人数などの人員配置計画、飼料など資材使用計画、費用と利益の計画を策定し、生産データを収集・分析しながら生産を行う。また、生産終了後は、計画と実績の比較を行い、その差異の要因について分析し、分析結果を経営に生かす方法を考える。なお、実習はグループに分かれて行う。	共同
	生産マネジメント実習Ⅱ（林業）	（概要） 効率的かつ安定的な林業経営を行うためには木材の生産性向上が不可欠であり、PDCAサイクルを意識した管理が必要である。本科目では、木材を生産する現場の管理技術を学ぶ。森林の面積・森林の内容・森林の林齢に応じた伐採計画と、その計画に沿った伐採時期や人員配置の計画、必要となる機材などの使用計画、費用と利益算出を策定し、実施する。計画の実施後、計画と実績を比較し、差異が生じた場合、要因が何であったかを分析し、分析結果を次の林業経営に活かす方法を考える。  （オムニバス方式/全60回） （⑦ 平岡裕一郎/1回）林業の基礎 （⑦ 平岡裕一郎、⑰ 池田潔彦/30回）（共同）林業のマーケティング、まとめ （⑦ 平岡裕一郎、⑳ 近藤晃/8回）（共同）土壌と水源保全 （⑦ 平岡裕一郎、㉕ 鶴飼一博/21回）（共同）経営基礎、森林レクリエーション	オムニバス・共同
	大型機械実習Ⅰ	農業機械のうち、トラクターは作業機をけん引したり駆動したりする機械で、農業機械のなかで最も基本となる。本科目では、トラクターの基本知識や運転操作方法、点検保守管理、農作業安全など大型乗用トラクターを扱うための基本的知識や基本的な運転技術を修得する。また、大型特殊（農耕車）の免許取得を目指す。  ・基本知識：トラクターの種類と特徴、構造と機能 ・運転操作方法：運転の基本操作と安全 ・点検保守管理：トラクターの点検方法、燃料と潤滑油、各種工具の使い方 ・農作業安全：農作業事故の実態と傾斜地作業の安全	集中



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目	生産技術	大型機械実習Ⅱ	農林業分野では経営体の規模拡大により、機械の大型化も進んでおり、より高度な大型機械に関する知識や技能が必要となっている。本科目では、大型機械実習Ⅰで習得した大型機械に関する基礎的な知識や技能を基に、農業機械利用組織のオペレーターや大規模受託農業者等に求められる高度な大型機械の知識と技能を習得する。また、農業機械士の資格取得を目指す。 ・農業機械の構造と機能、点検整備と簡易な修理 ・農業機械の効率的利用、各種工具と計測機器の取り扱い ・作業機の着脱調整と耕耘方法、運転コースの走行方法 ・農作業事故の実態、安全対策と事故防止	集中
		林業機械実習	林業機械化の進展は、労働生産性の向上、生産コストの削減、労働強度の軽減などに大きく貢献し、現代の林業では欠かせないものとなっている。本科目では、伐木造材、架線集材、機械集材、育林に使用する林業機械の操作方法について学ぶ。また、近年導入が進んでいる作業の効率化や身体への負担の軽減等、性能が著しく高い高性能林業機械の種類と基本操作について学ぶ。  架線集材：集材機、自走式搬機の基本操作 車両集材：集材車両の機械の基本操作 高性能林業機械：フェラーバンチャ、スキッダ、プロセッサ、ハーベスタ、フォワーダ、タワーヤーダ、スイングヤーダの基本操作	集中 ※隔年
		GAP演習	(概要) GAP (Good Agricultural Practice: 農業生産工程管理) とは、農業において、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理などの持続可能性を確保するための生産工程管理の取組である。様々な団体により、農業者が容易に法令を解釈でき、汚染を避ける効果的な措置をとるのに役立つガイドブックであるGAP規範が定められており、JGAPやGLOBALG.A.P.などの認証制度がある。本科目では、GAPの定義や導入されている背景、食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理に係るGAP規範、GAP認証制度などの基礎知識や、農産物の安全のための制度及び関連法について学び、GAPの実践方法について演習を通じて習得する。  (オムニバス方式/全30回) (⑫ 貞弘恵/5回) GAPの実践 (畜産編) (⑰ 杉山泰之/20回) GAPの定義と導入の背景、GAP規範、GAP認証制度、農産物安全のための制度・関連法 (⑳ 坂口良介/5回) GAPの実践 (栽培編)	オムニバス方式
		企業実習	これまでは小規模の圃場や演習林において、生産現場で必要となる基礎的な生産理論や技術を学んできた。しかしながら、実際に経済生産を行っている農林業法人の生産施設は学内の施設より大規模であるため、学んだ知識や技術を実践的レベルにするためには、優れた農林業経営体において、実地に学ぶ必要がある。本科目では、優れた農林業法人での実習を通じて、農林業法人の持つ優れた生産技術を学び、実践的な知識や生産技術を習得することを目標とする。	共同
展開科目	農山村の伝統・文化の継承	農山村田園地域公共学	農林業は地域と密着した産業であり、持続可能な産業となるためには地域社会との連携が不可欠である。この連携を確認する作業は、農林業の公共性を考える絶好の機会となるであろう。また、農林業には、生産以外の様々な多面的な機能がある。本科目では、農山村の歴史や文化、農業・農村の多面的機能、森林の多面的機能と多面的機能の保全の取り組みについて学び、農山村や田園空間に存在する固有の歴史、伝統、文化等について理解を深め、これからの農林業や農山村のあり方を考える能力の育成を目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
展開科目	農山村の伝統・文化の継承	農村景観論	日本の農村は、水田、畑、集落、雑木林、鎮守の森、用水路、ため池など、人の手が加わった自然が、長い歴史の中で有機的に連携し、多様な生態系や農村景観が形成されてきた。しかし、近年では、都市周辺農村での混住化、中山間地域の過疎化・高齢化など農村を取り巻く環境が大きく変化し、農村の景観も変化してきている。本科目では、人間の生活・生産活動が行われている動的な地域である景域について学び、景域はそこに暮らす人々の生業の歴史文化と関係しながら形成されてきたという視座に立ち、永続性のある、美しい、健全な景域をめざして、景域の秩序・管理・維持・開発の方法について学ぶことを目標とする。	
		農と食の哲学	現代社会において食料の消費と流通のあり方は大きく変化した。これを視野に入れない農業（食料の生産）には将来的な展望が拓かれないところまで、事態は進んでいる。それは農学という学問分野にとって、自らの足場が問われることを意味する。それを踏まえて本科目では、「農」と「食」という営みの本質について、両者の関係に注目しながら、対話を通して考え、持続可能なフードシステムとそれを支える農（学）の使命を構想・実現するための哲学的・倫理的な思考と対話の力を培う。	集中
		食文化論	和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたように、日本の食文化が世界的に注目されている。本科目では、「『自然を尊ぶ』という日本人の気質に基づいた『食』に関する『習わし』」である和食文化の特徴や、日本の食文化の変遷や現状について学ぶ。また、日本だけでなく、アジアや欧米諸国など世界各国の食文化も取り上げる。さらに、近年、見直しが進んでいる「在来作物」について学び、在来品種を用いた郷土食や今後の新しい活用法について考える。	
		在来作物学	在来作物とは、ある地域で世代を越えて受け継がれてきた伝統作物で、かつては日本全国それぞれの地域毎に、その気候風土や食生活と密接に関連した特徴的な作物が栽培されていた。しかしながら品種改良された作物に比べると、形が不揃いで日持ちがよくないため流通には不向きであると同時に生産性や収益性も低いため、栽培者の高齢化、後継者不足が深刻で、在来作物の多くが既に消失もしくは消失の危機に直面している。静岡県はその地理的な特徴から全国屈指の在来作物の種類を誇り、取り分け静岡市葵区や浜松市天竜区などの山間部にその多くが残っている。在来作物は焼き畑のような昔ながらの農法や伝統行事、地域の食文化とともに受け継がれてきた作物であるため「生きた文化財」とも言われ、さらには有機農法や機能性食品として、あるいは品種改良された作物では失われてしまった深い味わいや風味を生み出す遺伝的多様性を残している。地域の知的財産として注目され始めている在来作物の過去、現在について学び未来について考える。	
		農村社会論	現在、日本の農業・農村は、国際化、担い手の高齢化、耕作放棄地の増加、安全で安心な食料の安定供給などさまざまな課題に直面している。農村社会の特徴を生かしながら、今後の持続可能な農業や社会の発展のあり方を考えるためには、生産だけでなく消費を視野に収めることや、生産者としてだけでなく生活者としての地域住民に着目することが求められる。本科目では、都市における生活や地域社会と対比させながら、農山村の生活や地域社会の特徴を明らかにする。	
		農山村デザイン演習	農林業は地域に密着した産業であり、生業の場が生活の場であることが多い。このため、農山村地域を知ることが重要である。本科目では、農山村において地域住民と交流し、その体験を通して地域や地域住民が抱える課題を発見し、地域とともに課題解決策を考える。また、これらの体験を通じ、日本の中山間地域における農林業と生活の諸問題について関心をもち、地区住民と共に問題解決に挑戦するアイデアや方法を考え、戦略を立てる能力を身につけることを目標とする。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
展開科目	医福食農連携論	<p>持続可能な健康社会を構築するためには、食や環境と健康のつながり、すなわち「農」と「医」の連携を理解する必要がある。ヒトが健康であるためには、予防医学の理解が重要であり、そのためには環境や食に関する基礎知識が必要不可欠である。また、園芸活動を通じて得られる心身のリハビリテーションや心の癒し効果、コミュニケーション促進、共同作業による社会参加促進などのさまざまな効用を利用して、障害のある方ばかりでなく心身の健康や機能回復、心のゆとりや豊かさなど生活の質の向上を実現しようという「農」と「福」の連携の動きがある。本科目では、「農と医」、「農と福」の連携の現状を学び、その連携の重要性を理解することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)  (13 内藤博敬/10回) 健康とは何か、健康に影響を与える要因、病気の予防と健康増進、身近な健康問題と食と農の関わり  (42 吉村親/5回) 園芸の癒しの効果(園芸福祉士の役割)、農業における障害者雇用</p>	オムニバス方式
	グリーン・ツーリズム論	<p>グリーン・ツーリズムは農山漁村における自然・文化・農山漁村との触れ合いや人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動と定義されており、ヨーロッパ諸国では市民の余暇活動として定着している。一方、日本では、政府が普及促進に取り組んでいるが、国民に認知されず、定着していない。本科目では、「グリーン・ツーリズムとはなにか」から始め、ヨーロッパ諸国や日本のグリーン・ツーリズムの事例を通じ、グリーン・ツーリズムの課題と今後の展開について考える。</p>	
	コミュニティビジネス論	<p>コミュニティビジネスとは、地域の課題を地域住民が主体的に、ビジネスの手法を用いて解決する取り組みである。その活動分野は、まちづくり、環境、介護・福祉、IT、観光、地域資源活用、農業、就業支援などの幅広い分野に及んでいる。また、地域における創業機会・就業機会の拡大など様々な効果がある。本科目では、コミュニティビジネスの背景、展開過程やその意義等を踏まえつつ、静岡県内外の事例を基にして、地域社会におけるコミュニティの役割やコミュニティビジネスの効果と課題について学ぶ。</p>	
総合科目	経営分析演習Ⅰ	<p>経営実習Ⅰでの結果をもとに、実習を行った農林業経営体の生産部門の現状について分析を行う。分析を行う際は、生産物の生産計画と実際の状況、人員配置の状況、生産資材の調達や使用の状況、生産に必要な情報収集と利用の状況などについて調査し、最終的には生産部門での計画した利益と実際の利益を比較分析する。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員で、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行い、生産現場について考察する。</p>	
	経営分析演習Ⅱ	<p>経営実習Ⅱでの結果をもとに、実習を行った農林業経営体の経営について分析を行う。分析を行う際は、農林業経営体の沿革や経営理念、経営戦略、マーケティング、財務状況、リスクマネジメントなどについて調査を行う。また、実習を通じて発見した、農林業経営体の新たな価値や可能性、財務状況、経営上の課題について分析を行う。分析後は、その結果をもとに、学生及び教員のグループで、グループ・ワークを行った後に、課題と解決策についてとりまとめを行う。</p>	
	プロジェクト研究	<p>実習や演習などを通じて農林業経営体の分析を進め、分析を通じて発見した課題とその解決策について農林業経営体への提案書をまとめ、これらを通じて、研究手法や課題解決のための能力を習得することを本科目の目的とする。農林業経営体の事前調査、研究の進め方、調査方法について教員から指導を受けながら調査計画を作成し、計画発表会を開催する。また、調査結果や調査手法について指導教員と議論し、的確に結果を解釈し、教員から指導を受けながら提案書を作成し、発表会を開催する。</p>	

## 静岡県立農林環境専門職大学 設置認可等に関わる組織の移行表

平成31年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	平成32年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由																																																													
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>静岡県立農林大学校</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%;">養成部</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">100</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">-</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">200</td> </tr> <tr> <td>研究部</td> <td style="text-align: center;">20</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">40</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">計</td> <td style="text-align: center;">120</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">240</td> </tr> </table> </div>				養成部	100	-	200	研究部	20	-	40	計	120	-	240	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>静岡県立 農林環境専門職大学</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="4" style="text-align: right;">専門職大学新設</td> </tr> <tr> <td colspan="4"><u>生産環境経営学部</u></td> </tr> <tr> <td style="width: 15%;"><u>生産環境経営学科</u></td> <td style="width: 10%; text-align: center;">24</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">-</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">96</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">計</td> <td style="text-align: center;">24</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">96</td> </tr> <tr> <td colspan="4" style="text-align: right;">静岡県立 農林環境専門職大学短期大学部</td> </tr> <tr> <td colspan="4"><u>生産科学科</u></td> </tr> <tr> <td>生産科学科</td> <td style="text-align: center;">100</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">200</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">計</td> <td style="text-align: center;">100</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">200</td> </tr> <tr> <td colspan="4" style="text-align: right;">静岡県立農林大学校</td> </tr> <tr> <td>研究部</td> <td style="text-align: center;">0</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">0</td> <td style="text-align: left;">平成32年4月学生募集停止</td> </tr> <tr> <td>研究部</td> <td style="text-align: center;">20</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">40</td> <td style="text-align: left;">平成33年4月学生募集停止</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">計</td> <td style="text-align: center;">20</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">40</td> </tr> </table> </div>				専門職大学新設				<u>生産環境経営学部</u>				<u>生産環境経営学科</u>	24	-	96	計	24	-	96	静岡県立 農林環境専門職大学短期大学部				<u>生産科学科</u>				生産科学科	100	-	200	計	100	-	200	静岡県立農林大学校				研究部	0	-	0	平成32年4月学生募集停止	研究部	20	-	40	平成33年4月学生募集停止	計	20	-	40
				養成部	100	-	200																																																														
				研究部	20	-	40																																																														
				計	120	-	240																																																														
				専門職大学新設																																																																	
				<u>生産環境経営学部</u>																																																																	
				<u>生産環境経営学科</u>	24	-	96																																																														
				計	24	-	96																																																														
				静岡県立 農林環境専門職大学短期大学部																																																																	
				<u>生産科学科</u>																																																																	
生産科学科	100	-	200																																																																		
計	100	-	200																																																																		
静岡県立農林大学校																																																																					
研究部	0	-	0	平成32年4月学生募集停止																																																																	
研究部	20	-	40	平成33年4月学生募集停止																																																																	
計	20	-	40																																																																		